

京都の西田幾多郎と東北の田辺元

——一九一〇年代における両者の関係性——

山 本 舜

序 論

本稿では近代日本哲学を代表する二人の哲学者、西田幾多郎と田辺元の関係性について論じる。とはいえ、よく知られた両者の哲学的対立、論争に注目するわけではない。周知の通り、昭和に入ってから両者は各々の哲学的立場から対立して溝を深めていったわけだが、その出会いについて言えばむしろ反対に、お互いがお互いを尊敬し、近い問題意識で学究に励むような積極的な関係にあった。従来の研究を見ると、両者の関係に言及するほとんどの見解は彼らの思想的対立に注目している。だが、そもそも彼らが対立以前にいかなる関係にあったのかということは、必ずしも自明ではないように思われる。本稿ではこの対立以前、特に両者の出会いの現場に立ち返り、できるだけその親近性を指摘していくことで、従来考えられてきた両者の関係性を今一度見直すための基盤を整えてみたい。

その際、両者の哲学的立場や主張がどのようなものであったかに焦点を当て、問題を哲学的に限定してその徴標を打ち出しておくことは、研究上重要なことだろう。筆者の関心を踏まえつつ議論を先取りして言えば、この時期の両者の問題意識を結びつけた一つの要因として「数学」を挙げることができる。以後いくらかこの点にも触れることに

なるが、それは彼らにとつて同時に哲学への取り組みの一貫であつた。ただし本稿は、そうした問題自体の渦中へと深く入り込み、いわば彼らの問題を筆者の手で引き受けながら熟考する方向へ向かうわけではない。むしろそうした検討の前段階として、この時期の両者の関係性や各々の問題意識の形成をできる限り立証的に見通すことに、あくまで力点を置く。その意味で、本稿はまずは歴史研究的な観点から検討を行う。そもそも既に触れたように、この時期の内状に関しては、従来の研究でも十分判明になっていない事柄が未だに多い。時系列に沿つて書簡や日記を確認していくことで、曖昧だったこの時期の両者の関係をそれなりに具体的に浮かび上がらせることができるだろう。

もちろん単に史料の整理だけでなく、彼らの哲学的考究に関しても同様に注目しなければならない。藤田正勝が既に指摘しているように、この時期の西田、田辺が執筆した諸論文は直接的にも間接的にもお互いを意識している内容が随所に見出される。藤田はこのことを踏まえて、「これらの論文は、西田と田辺のあいだでなされた思想的な応答として、ひとつながりのものとして読まなければならない」⁽¹⁾と述べている。このような連綿とした「思想的な応答」に注目するとき、彼らの関係性は昭和期以降の險悪な対立から連想されるものとは相当異なつた在り方で確認されることになる。また、従来この時期の田辺は数理・科学哲学と新カント学派的認識批判研究の時期として理解されてきたが、その内実に関しても本稿である程度検討されることになるだろう。

さて、本稿では考察の射程を一九一〇年代に限定し、次のように区分けして論じる。

- 一 「純粹経験」と心理主義（一九一〇—一九一二）
- 二 交流の起点——自然科学と歴史をめぐつて（一九一三）
- 三 書簡から見る心理主義的術語の克服（一九一四）

四 数の生成、基礎づけ——数学と現象学への関心（一九一五—一九一七）

五 田辺の博士号取得と京都帝国大学招聘（一九一八—一九一九）

両者の出会いを論じる上で、一九一〇年代は奇しくも高い利便性を備えている。まず一九一〇年は、西田が京都帝国大学に——倫理学担当としてではあるが——助教授として就任した年である。この意味で、「京都の西田幾多郎」が始動した年であると言える。加えて、田辺は同年に「措定判断に就て」という処女作を発表しており、研究者としてのキャリアをスタートさせている。翌年、弘道館から『善の研究』が出版されるのは周知の通りである。

その後、田辺は東北帝国大学で教壇に立ち、西田と書簡のやりとりを通じて孤独に研究を続けた。この「東北の田辺元」は、やがてこの時期の成果を博士論文としてまとめた後に、京都帝国大学に助教授として招かれることになる。この招聘の年がちょうど一九一〇年代の終わりの年である一九一九年に当たる。以下では、京都帝国大学において西田・田辺二大体制が確立されたこの年を一旦の終着点として、そこに至る道程を描いてみたい。

一 「純粹経験」と心理主義（一九一〇—一九一二）

一九一〇年の時点では田辺はまだ東京帝国大学の大学院生であり、ちょうど処女作を発表して学界に実質的に足を踏み入れたところであった。彼は一九一二年には大学院を退学して、一九一三年八月に東北帝国大学の理学部講師に就任する。ここから田辺の「東北帝国大学時代」が始まる。まずはそれ以前の彼らの動向を確認していこう。

この期間は、両者の間に直接のやりとり、例えば書簡や論文での応答などがあつたわけではない。しかし、既に藤

田正勝が指摘しているように(2)、この期間の論文にも互いに間接的に影響を意識し合っているような点を見出すことができる。

まず田辺の側から見ていこう。一九一〇年九月に彼は論文「措定判断に就て」を『哲学雑誌』に投稿する。これは西田が既に「實在に就て」(一九〇七)や「純粹経験と思惟、意志及知的直観」(一九〇八)で発表していた「純粹経験」の考察をもとに、ここからいかにして「意識中に於て自我と独立に之と対立する」ところの「対象」が生まれてくるかに目を向けたものであった「T一・四」。田辺はここでアロイス・リールにならって、「措定判断」というものを考えている。「吾人が特に之に注意を向けぬときは単に純粹経験の有様で」あるにも関わらず、「意識を向けると、此純粹経験の状態が分裂して感覺的写象は自我と区別せられて客観的对象として措定せられる」[「T一・四」]。田辺はこのように対象を「措定」する作用を「措定判断」と呼んだ。まずここに「純粹経験」という出发点から哲学を開始する、西田と田辺の最初の接点が既に現れている。この時点で、彼らは出发点を共有していたわけである。強いて差異を指摘するとすれば、西田が統一性という観点からこの基盤を整えることに尽力したのに対して、田辺はこの整えられた基盤を踏まえ、そこからいかにして分化発展が生じてくるのかを詳述する次なる課題に取り組んだ点を挙げることができる。

ただ、これ以降しばらく田辺は「措定判断に就て」のような仕方で自説を「論説」することを控え、『哲学雑誌』の「批評紹介」を主たる発表の場とすることによって、他者の思想を採り入れる期間に入っていく。宮本和吉の回想によれば、この頃の『哲学雑誌』は彼と伊藤吉之助が編集を担当しており、田辺には「論文の寄稿や、海外思潮の紹介などをよく頼んだ」のだという(3)。

同年十一月にはリップスの『意識と対象』を紹介し、翌年の一九一一年六月から七月にかけては「イエルザレム

氏の『批評的觀念論と純粹論理学』を発表している。この二つの論文は主に同時代の所謂「心理主義」の思想を概観する目的で書かれたものである。とりわけ後者は、当時有力であったヴィルヘルム・イエルザレム⁽⁴⁾という心理主義者による反心理主義的傾向(批判的觀念論の傾向)に対する批判を紹介したものであり、田辺はこれらを「心理派(Psychologismus)」と「先天派(Transcendentalismus)」という名前で説明している「T十四・十一」。この対立図式が同年の西田の「認識論に於ける純論理派の主張に就て」の冒頭で用いられている⁽⁵⁾ことは、藤田が指摘しているように⁽⁶⁾、田辺から西田への影響がはつきりと見てとれる例であると言つて良いだろう。またこの批評紹介は、西田においても田辺においても以降頻出することになるフッサール、リッケルト、コーヘンの名前が初めて明確に登場する著作でもある。イエルザレムはとりわけフッサールの『論理学研究』、コーヘンの『純粹認識の論理学』を批判し、共に論理学としての職分を誤つたものと解釈している。イエルザレムからすれば論理学の職分は、「思惟必然」もまたそれに基づくところの「客観的經驗的關係」を探り、「共通なるものを取出して、人類の普遍確実な經驗が確立するに有用の形式を発見する」ということであつた「T十四・二九」。ただ、この批判が果たして射たものであるかどうかは別途検討を要するところではある。例えば、イエルザレムのコーヘン解釈に関しては、後にこのように彼を紹介した田辺自身が「認識論に於ける論理主義の限界」において「誤解に基くもの」として退けている「T一・三七」。

西田の側はどうだろうか。一九一〇年の八月に学習院大学から京都帝国大学に移つた西田は、まずベルクソン受容を反映している。この年の二月に京都文学会が設立され、機関紙『芸文』の刊行が始まつたが、そこで彼は桑本嚴翼からベルクソン論を書くように依頼を受けた⁽⁷⁾。「ベルグソンの哲學的方法論」はこうした経緯で書かれている。依頼の来る数週間前に「哲学概論」(おそらく後に『思想と動くもの』に収録されることになる「形而上学入門」のこと

だろう)を借りており、内容としてもこれを参考にしているようである。

翌年一九一一年、一月に『善の研究』が出版される。先のベルクソン論に比べて少し短い「ベルクソンの純粋持続」を十一月に発表する以外は、既に触れた「認識論に於ける純論理派の主張に就て」が圧倒的に注目に値する。ここで西田においてもフッサールやリッケルト、コーヘンといった当時勢力を持っていた哲学者に対する言及が直接なされている。この論文は『善の研究』から『自覚に於ける直観と反省』への思索の変化を追う際によく引き合いに出される比較的有名な論文であるため、ここでは特に内容を取り扱わないでおく(8)。

一九一二年になると、両者とも多くの論考を発表するようになる。田辺に関しては依然として「批評紹介」だが、まず彼にとつて初めての「科学哲学」に関わる研究として、アレキサンダー・マスコウスキーの論文を紹介した「相対性の問題」が発表され、続いてブルーノ・バウフによる「カントと自然科学」、エミール・ブートルーの『自然法の観念』、最後に桑木或雄の「物理学上認識の問題」をそれぞれ紹介し、本格的に自然科学の検討に入っている。この時期は、理解はまだ覚束ないようだったが、相対性理論に強い関心を示している。こうした研究は主に桑木嚴翼の弟にして物理学者であつた桑木或雄(9)に導かれており、後述するように、この批評は翌年以降の論文とも深い関わりを持っている。

西田も旺盛で「法則」、「論理の理解と数理の理解」、「高橋(里美)文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」、「認識論者としてのアンリ・ポアンカレ」といった諸論考を発表している。西田の思想形成の観点から、高橋里美からの批判への答弁はこれまでも比較的注目されてきた。「法則」にせよ「論理の理解と数理の理解」にせよ、『善の研究』の段階では十分に検討されていなかった論理的な問題への取り組みがうかがえる。この後触れる田辺との関係性のために、「論理の理解と数理の理解」にだけ少し触れておこう。

後年の西田自身が末尾に「此論文は次の著書『自覚に於ける直観と反省』へ私の考を導いたものである」「一・二六七」と付したことを受けてだろうが、この論文は『自覚に於ける直観と反省』での議論の布石というような位置付けで一般に認識されている。もちろんそうした面にも重要性は見出されて然るべきなのだが、後年の田辺との関係性を勘案すると、この論文の重要性は「自覚」概念の展開という内容的な側面だけにあるのではなく（発想自体は「認識論に於ける純論理派の主張に就て」の終わりですすでに表明されている）、むしろこの着想を前面に押し出すために用意された数学的議論、またそこにリッケルトを起用するという現代の見地から見れば斬新な展開方法にあると筆者は考えている。後に田辺の博士論文の元となった諸論文で頻出するリッケルトの数概念分析は、元々ここでの西田の影響によるものであることが後の書簡から確認できるのである⁽¹⁰⁾。

このように、両者は出会う前から「純粹経験」という出发点を意識しつつ、そこにいかにして対象認識に関わる論理的な問題を回収していくかという課題を共有していた。西田は主にア・プリオリな論理学的法則の考察を手掛かりに、田辺は主に物理学における認識論的問題の考察を手掛かりにこの問題に取り組んでいたと言える。

二 交流の起点——自然科学と歴史をめぐる（一九一三）

さて、ここまでの一九一〇年から一九一二年までの両者の関係性というのは、各々の関心の類似性・親近性を指摘できるといふ次元に留まっており、田辺が西田の「純粹経験」から受けた影響以外には、特に直接的な結びつきは見られない。しかし一九一三年はここまでは違い、両者が最初にコンタクトを取った年としての象徴性を帯びている。八月に田辺が東北帝国大学の理学部講師に就任すると同月に、西田も宗教学講座の教授職へ異動する。その後西

田は九月から論文「自覚に於ける直観と反省」の連載を開始する他、十二月に文学博士号を授与されている。一方、田辺はこの就任前の三月から五月にかけてマックス・プランクの『物理学的世界像の統一』⁽¹⁾を紹介している。これは前年の桑木の批評紹介から関心を引き継いだものであり、後年、自身が編者となった『哲学論叢』(岩波書店)シリーズでは、この翻訳を担当して出版している⁽²⁾。その職分にふさわしく、八月には「相対性原理に関するナトルプ氏の批評」、十二月には「ポアンカレ氏『空間と時間』」といった科学哲学的な研究をそれぞれ批評紹介として発表している。また、ちょうどこの両研究の間、九月に発表した「物理学の認識に於ける記載の意義」において田辺は、「以上述べた考は西田教授の著作『善の研究』及「認識論に於ける純論理派の主張に就て」と題する論文に現れた思想に負ふ所が甚だ多い」「T一・二六」という仕方、西田の実名を挙げてその影響を告白した。おそらくこれが両者を関係付ける最初の公の言明である。

田辺はこの論文で基本的にマールブルク学派の哲学に依拠しながら、キルヒホッフとマッハを批判的に分析すると、物理学が扱う概念形象と思维の関係を考察している。田辺によれば、キルヒホッフは物理現象の背後に「原因」を問い、そこに擬人論的な解釈を持ち込むことで形而上学へ足を踏み入れてしまう物理学上の「説明」に反対し、物理学は現象を忠実にただ「記載」「記述」(beschreiben)すべきであるという立場を取った。これは物理学が認識論的な問題に足を踏み入れる際に遭遇する特筆すべき問題なのだが、特にこの時代には田辺の周りでは桑木或雄らが主題的に取り組んでいた。その意味で、前年の桑木の紹介から先ほどのプランク紹介にまたがって連続的にここに至っているわけである。

ところで、そもそも西田と田辺はどのように面識を持つようになったのだろうか。その出会いに深く関係すると考えられるのが、西田が後に「自然科学と歴史学」という題目で発表することになる論文である。この論文の成立経緯

に注目しよう。宮本和吉がこの当時『哲学雑誌』の編集に関わっていたことは既に述べたが、それは要するに哲学会の世話人であったということの意味する。この時期の西田の書簡を見ると、西田に対して宮本が哲学会での講演を頼んだ内容のものが確認できる。三月二十五日付の書簡には次のようにある。

如仰小生少しく用事有之来月五六日頃出京一週間くらいの滞在の積りに候が御話の公開演説といふ如きことは小生極めて拙劣に有之且つ生来甚だ此種のことを好み不申折角の思召ながらできることならご辞退申上度候 萬已むを得ずとならば「自然科学と歴史」といふ題にて簡単に話してもよろしくとも考へ候へども此話は一般の人にはあまり興味なき事なるべく専門の人にはウィンデルバント、リッケルトの受売にてめずらしきことにもあらず
〔十九・四三八―四三九〕

ここでは西田は講演について「拙劣」また「受売」にすぎない話しかできないと洩い態度を取っているが、結局この講演を引き受けて、四月六日に「歴史と自然科学」と題して発表した⁽¹³⁾。そしてこの講演の晩餐会で、西田は田辺と場を共にしたことを日記に残している〔十七・二二三〕。この記録が西田の日記中に見られる最初の「田辺元」の記述であり、少なくとも文献上確認できる限り、西田と田辺が現実の同じ場において出会った瞬間である。この出会いを経て、田辺は西田の名前を自身の論文に引用したり、翌年以降書簡のやり取りをするようになったと考えることは、あながち的外れな推論でもないだろう。ともかく翌年以降の両者の関係を見据えたとき、この哲学会での講演とその晩餐会が一つの歴史的な起点としての意味を帯びてくるわけである。

内容としては、この主題は西南学派の意義を強く押し出す意味を持っていた。もともと自然科学と歴史という主題

はヴィンデルバントが一八九四年にシュトラスブルク大学の総長就任演説として扱ったものであり、西田や田辺に限らず注目された思潮だった⁽¹⁴⁾。西田は八月に論文「自然科学と歴史学」としてまとめている。この主題は後に田辺も引き受けており、一九一五年の「自然科学対精神科学・文化科学」という論文がそれに当たる。

三 書簡から見る心理主義的術語の克服（一九一四）

さて、このように西田との邂逅を果たした田辺は、前年一九一三年より始まった『自覚に於ける直観と反省』の連載に呼応しながら、一層西田との結びつきを強めていくようになる。実際のやりとりを見ていく前に、この一連の論稿について、本稿の以下の展開と関わる点にのみ簡単に触れておきたい。そもそも西田がこれを書き始めた時、最初の題目は「思惟と直観」であり⁽¹⁵⁾、これを「自覚」に基づいて説明していくことが念頭に置かれていた。その試みは五年近く続けられたが、この連載と田辺に対する書簡、さらに田辺の論文との間には実は非常に密接な連関を見出すことができる。

そもそもなぜ「思惟と直観」あるいは「反省と直観」とが問題になったのだろうか。この対立は、まずはカントで捉えるべきだろう。カントは周知の通り『純粹理性批判』の超越論的感性論において直観形式としての時空間を論じ、その「受容性」(Rezeptivität)に対して思惟の「自発性」(Spontaneität)を掲げる超越論的論理学の領域を区別した。その「現象」性から一歩進めて言えば、カントにおいては触発の契機としての「物自体」(Ding an sich)の可能性が、認識不可能であるにせよ、どこまでも残されているわけである。そこに経験的認識のある意味での非合理性——論理学から逃れていくような側面——が確保されている。田辺が紹介したりップスやイエルザレムは経験的、心理学的な

立脚地の優位性を主張したとされるが、ここに所謂新カント学派らが反対する理由も存する。例えばマルブルク学派のコーヘンは、カントがまさに「論理学」に先立って「感性論」を置いた点を強く批判している。カントにおいては感性論が論理学に先行するという事態によって、「基礎づけ」(Grundlegung)が不可能になっている。なぜなら思惟の総合の「統一」(Einheit)は、まずもって直観の多様を——論理的には無根拠に——前提しているからである(16)。「与えられ、」多様に対して、思惟は「思惟自身以外、或るものにその発端を持つ」ということになる(17)。それは根拠づけを遂行する思惟の出立点がすでに自身の管轄外に存するということである。このようにコーヘンは、論理学が感性論に依存する関係にあつては基礎づけを遂行するものとしての思惟の基礎それ自体が毀損されていると考える。以上のような点から言つても、新カント学派の所謂「論理主義」というのは、単なる「思惟」の重視としてではなく、その「根柢を基礎づける」という問題意識に貫かれたものとして読まなければならない(18)。

西田にせよ田辺にせよ、「思惟と直観」を問題にする際にどちらかの立場を堅持するということはない。彼らがとつたのは「経験の非合理性」という側面を一方で認めつつ、しかしまた対象や世界を根拠づけようとする論理学的思惟の重要性をも引き受けるという困難な道であつた。このことを書簡を通じて確認しよう。

両者の個人的なやりとりを書簡のうちに見出そうとするとき、書簡による交流が始まるのはこの一九一四年からである(19)。一月一日、西田が年賀状としてだろうが、田辺に宛てた初めての書簡では、近年の研究の動向についての内容の後、「書籍など十分有之か 御研究の御便宜はいかん」「十九・五〇七」と相手を氣遣う言葉が見られる。

両者の思想的な応答の起点と考えてよいものとして、この年の二月から三月にかけて発表された田辺の「認識論に於ける論理主義の限界」がある(20)。副題の「マルブルヒ派とフライブルヒ派の批評」が示すように、ここで田辺は主に新カント学派の限界を批判的に吟味し、その限界を超えて「直接経験」の意義を獲得することを論文の目的と

していた。先に述べたように、感性的直観というものに過敏になっているところの「論理主義」に対して、この立場を徹底するにしてもやはり「直接経験としての感覚」[T・一・三六]が潜在的に与えられていなければならないことを田辺は主張している。

西田はこれを読んで書簡としては膨大な量の感想を送っている。そこで田辺を大いに評価しつつ(2)も、「感覚」や「経験」といった言葉に対して以下のように敏感になっている。

今日の所謂論理主義の認識論には限界がある、認識論の問題を随意に制限することなく残りなく解決するには之を補ふに経験的方法によらねばならぬといふ考は小生も全然同意に御座候。この問題を解せざれば我々はいつまでもカントの立場以上に出づるを得ず、従つてカントの難点はいつまでも除くを得ずと存じ候。小生はこれが今日認識論の発展し行く途にあらざるかと存じ候。而してこの問題を解くには直観の性質を明にし之と思惟との關係を明にすることにあらざるかと存じ候。(但し貴兄が単に「経験的方法」といはるゝ語は従来の経験といふこととの誤解を招く恐ありと存じ候 何か語を換へて然るべきか) [十九・五〇八]

注目すべきは最後の括弧書きである。ここに、西田自身が『善の研究』以来の「純粹経験」という術語使用から「直観」「反省」「自覚」という術語使用へと変化を遂げた理由を見出すことは難しくないだろう。この指摘を受けてだと考えられるが、田辺もこの数ヶ月後、九月に発表する「数学的対象の存在に就いて——メデイクスの論文を読む——」において「……」感覚的結合といふ概念は其が心理学的構成の結果を意味するものたる点に於て不適當である。思惟を規定する根原たるものは未だ心理学の反省的思惟に由り感覚などといふ様に分析構成せられない直接経験其物でな

ければならぬ。而して此こそ真に直観と称すべきものであらう」「T十四・一八二」という仕方では「直観」という術語に歩を進めている。このようにして両者は当時の「心理学的」な意味を帯びた術語からの脱却を図っていた。否、そこに留まらない。さらにこの論文は、西田が書簡で述べていた「直観の性質を明にし之と思惟との関係を明にする」という企てに対する、田辺なりの一つの返答の試みとして読むことができる部分がある。以下で少し詳細に踏み込んでみよう。

この論文以降田辺は『数理哲学研究』の元となる数理哲学的な論文を発表の中心としていくという点を考慮すると、彼の数学的関心はこの「数学的对象の存在に就いて」から本格的に動き始めると言つて良い。これは *Kant Studien* に掲載されたフリッツ・メディクスの論文を通して、数の成立を問題にしたものである。「元来余は余の貧乏なる知識の許す範囲に於て独立に数学の基礎に関する問題を論じて見たいと思つて居た」「T十四・一六九」と述べているように、それまで潜在的だった数学的関心が顕在化したものと見ることができる。

ここでは田辺はメディクスの論説に満足できずに自説を交えながら展開をしているが、興味深いことに、その中で西田の『自覚に於ける直観と反省』や「論理の理解と数理の理解」を田辺なりに解釈しようとしているような部分が見受けられる。メディクスはカントの純粹直観に動性を認めるためにフィヒテの純粹延長の発想を起用して、反省的思惟の活動性から数や時空間が生じてくることを主張した。田辺はこの点に意義を認めつつ、そうした反省的思惟の直観に対するメディクスの見解に疑義を呈し、自ら問題を引き受けていく。この文脈で先ほどの「直観」への踏み込みが見られるのであり、以下のように続く。

メディクスも亦何等の反省を加へざる直接経験を感覚的知覚と称し、其非概念的な此時此処の制限に打克つて初

めて認識の成立する事を説くが、余は斯かる心理的概念を避け、寧ろ直接経験の意味に於て直観と称するのを適当と思ふ。然らば斯様な直観と数学的形象の構成の作用たる反省との関係は如何であらうか。メデイクスの所謂反省が知覚を克服するといふのは如何にして可能であるか。〔T十四・一八二〕

これは、田辺なりに「思惟と直観」の關係性を問おうとしたものと考えられる。ここから田辺はフィヒテ、ベルクソンの名前を挙げつつ延いてはデデキントやロイス、リッケルトの「一者、統一及び一」も引いて「反省的思惟が如何にして所謂純粹延長を生じ得るか」〔T十四・一八二〕を考察していく。その基本的な方法は、田辺自身も「此問題に就ては西田教授が既に『論理の理解と数理の理解』の論文に精細に論ぜられた」〔T十四・一八五〕と述べているように、西田が「論理の理解と数理の理解」で成したところに基づいている。ただ完全に踏襲的というわけではなく、叙述において田辺の理解が現れており、田辺が「論理の理解と数理の理解」の本質をどう読み取ったか、ということが示されている。

この時期の西田は田辺の書いたものほとんど目を通し、書簡でコメントを寄せている。批判的な意見も少なくないが基本的には田辺の研究に非常に好感を持っており、「小生は貴兄の如き同好の研究者を得たることを深く喜び且つ樂み居り候」〔十九・五一七〕と述べたり、翌年宮本和吉宛の書簡で「如貴命田辺君の努力と進歩には小生大に敬意を表し居り候 此等の人々後日我国の哲学を担ふ人ならんと存じ居り候」〔十九・四四三〕と期待を寄せたりしている。メデイクス論文についての書簡では、西田はメデイクスにおけるフィヒテの起用などを評価しつつ、「存在」に関する議論を批判的に見ている。田辺のメデイクス論によれば、メデイクスは数学的存在を語る際に「存在」の「種類の別」の他に「程度の差」を考える。田辺も西田同様、この点を批判していた。数学的对象をめぐる「存在」の問題

は、その「存在」の意味をどう考えるかということの複雑さに照らして言えば、決して単純明快な問題ではない。西田は、この問題は「我々の思惟の体系、種々の経験の体系がいかに区別せられいかに統一せらるゝ（か）」といふこと「十九・五一八」が明らかになつてはじめて解決されると田辺に伝えているのだが、このことは連載中の『自覚に於ける直観と反省』の中心的な問題意識と重なつていた。この書簡の後に発表された「十一」から「十三」の論文では、西田自身も刊行後の目次に付しているように、「純粹思惟の体系」から「経験の体系」への推移が論じられている。大きな見取り図を描くとすれば、ここで西田は、論理学がその根本法則とする同一律の原理から「数」の概念が生成される過程を示し（論理から数理へ）、さらにこのような純粹思惟による次元から拡張的に、しかも一種の実在性を帯びたものとして「時間空間」が考えられる方向へ経験体系を考えていこうとする。ここから、一般に想定されるような「空間、時間、因果の形式に当嵌めて考へること」「二・二六」として想定される客観的な「存在」⁽²²⁾の問題が関与してくるのであり、西田はこの一連の流れの中で、これらの基礎を根柢から考え直そうとしていると言つてよい。このように、西田が『自覚に於ける直観と反省』で遂行していた課題は、実質的に同時期の田辺の課題と深く重なり合つていたということが指摘できる。

四 数の生成、基礎づけ——数学と現象学への関心（一九一五—一九一七）

一九一五年には田辺の初の著書である『最近の自然科学』が公刊される。西田もこれを一読しており、「好著」、「最近の自然科学を叙述せられたる部分に於ては小生は多大の利益を受けたことを感謝いたし候」「十九・五二八」と書簡を送っている。また、この年は西田、田辺ともにコーヘンの影響が著しく見られる。すでに述べたように、西田は

合理的な「純粹思维の体系」から「経験の体系」、つまりある意味で非合理的と称される感覚的経験とその認識について考えていくのだが、ここでコーヘンを起用している。一方田辺は「自然数論」において、自然数の生成という数学基礎論的な課題に取り組むにあたって、西田の議論を踏襲する形でコーヘンを用いている。田辺の「自然数論」は三月、四月と『哲学雑誌』に掲載されたが、それに先立つ二月に田辺は西田にその旨を伝えていた。西田は「小生も幼時は数学に興味をもち居り」「十九・五二二」と幼少期以来の数学的関心を告白し、連続の問題に非常に興味を有していることを伝えている。コーヘンの *Infinitesimal* (無限小) については、近年の数学的傾向と相反するものであるにもかかわらず、その意義を重視していたことがこの書簡から分かる。

さてこの「自然数論」以下、「連続、微分、無限」、「負数及び虚数」、「数理の認識」、「変数及び函数」、「幾何学の論理的基礎」⁽²³⁾といった諸論文は田辺の全集には未収録であるが、それは実質的には『数理哲学研究』の内容を構成しているものだからである。この内容に関する詳細な分析は紙幅の都合上別稿に譲りたいが、これらの論文において表明される最終的な立場は「認識論に於ける論理主義の限界」以来解釈し続けてきたマールブルク学派の哲学（ナトルプ、カッシーラーを含む）と、『自覚に於ける直観と反省』における西田の立場に負っている。ここでは「自然数論」にのみ簡単に触れておこう。

「自然数論」では、クロネッカーとヘルムホルツ、後の数学基礎論論争で「形式主義」の名を冠されるヒルベルト、その後の田辺に「ほとんど私の一生を貫く問題となつたほど」⁽²⁴⁾「T十二・三三二」の影響を与えたデデキント、さらに新カント学派とは別の意味で「論理主義」として認識されるフレーゲ、ラッセル、クーチュラーといった、数学の哲学においてはよく知られた名前が紹介される。しかしこのいずれに対しても、田辺は自分の立脚地を見出してはいない。現代の数学基礎論の一般的見地からすれば意外なことに、田辺はまず西田も参照したリッケルトを評価し、その上で

方法としてマールブルク学派の哲学に依拠する²⁴。ただ、既に「認識論に於ける論理主義の限界」で指摘したように、彼らの論理主義には限界があり、そこで改めて——所謂心理主義的な「経験」とは別の仕方で——「直観」概念を考える必要が出てくる。これらを踏まえ、「直観の原始的統一」²⁵の自己展開として自然数の生成を論理的に（超越論的に）基礎づけようとするのが田辺の「自然数論」である。

これは「措定判断に就て」以来田辺が問題にしてきた「純粹経験」からの「対象」の成立という問題を、数学的に限定した仕方で踏襲したものと言うことができる。その意味で究極的な出发点、立脚地は西田の発想に近い。もちろん数学者や数理哲学者の見解を丁寧におさえたり、数学の議論に問題を限定して精緻に組み立てていく点に関しては、西田よりも田辺の方が明らかに卓越している。ただ、その議論の根本に関して西田は、不十分さを次のように指摘している。

〔……〕御論文は数の基礎を論ずるものとしては十分なる立派の論文と存じ候が貴兄が尚進んで御研究になるには思维に関する論理的及び認識論的研究及び「十」の始めに論じられた様な Royce の所謂 Self representative System の如きものについて深き哲学的思索を要することと存じ候（つまり我田引水かも知らぬが主観と反省との深き研究を要することと存じ候） 数学や物理学の基礎の研究と共に此等の議論の根本となる研究が尚一層必要と存じ候 〔十九・五二四〕

これが西田にとって『自覚に於ける直観と反省』の中心問題であったことは言うまでもない。これ以降の『数理哲学研究』収録論文においても、自然数の基礎づけは洗練されながら行われていくのだが、例えば次の「連続、微分、無

限」においては「(……) 連続体系の成立を明にする準備とし、同時に『自然数論』の旧稿の不備を補ひたいと思ふ。若し余の希望する如く此説明の中に幾分でも旧稿の欠を補ふものがあり得たならば、余は其が直接間接に西田教授の与へられた指教に負ふものなることを言明し其に対して感謝の意を表さなければならぬ」⁽²⁶⁾と触れられ、「反省作用」についてのより詳細な分析が加えられている。

一九一六年二月に田辺は芦野敬三郎の次女ちよと結婚する。その後夫婦ともに体調を崩したようで、西田はこれを書簡で気遣い、休息を勧めている⁽²⁷⁾。この年に田辺は『数理哲学研究』に収録されることになる論文として、先ほど触れた「連続、微分、無限」の他に「負数及び虚数」を書いてゐる。またポアンカレの『科学の価値』の翻訳、さらにこの年の四月から刊行された『哲学研究』の第二号に「普遍に就いて」を発表している。翌年の『哲学研究』への寄稿は「数理の認識」「時間論」が挙げられるが、いずれも西田が書簡で寄稿を頼んだものである⁽²⁸⁾。西田自身、創刊号の巻頭を飾る形で「現代の哲学」を発表し、これ以降『自覚に於ける直観と反省』を『芸文』からこちらに移動して連載するようになる。また、この頃からフッサールの現象学にも積極的に関及するようになってくる。その背景もやはり田辺宛の書簡に現れている。この前年のやりとりではフッサールに関する話題は非常に多く、例えば先述の「自然数論」の議論をなお深めるといふ問題のために『論理学研究』を勧めていたり、『ロゴス』に掲載された「厳密な学としての哲学」を貸し出したりしていた⁽²⁹⁾。このやりとりの田辺側の結実を「普遍に就いて」に見出すことができる。そこで田辺は、西田がちょうどこの年の一月に発表した「二十四」以降の議論⁽³⁰⁾を踏まえて、フッサール周辺の対象、内容、作用の問題について論じている。また、余談ではあるがこの論文で田辺が「一般者の自己限定」[T・一〇四]という表現を用いていることもここで注記しておきたい。

一九一七年に、ついに西田は『自覚に於ける直観と反省』の連載を打ち切る。また、田辺も年内に数理哲学に関す

一連の論文の執筆を終え、翌年一月から三月に最後の「幾何学の論理的基礎」を発表した後、博士論文としてまとめて京大に提出している。この流れに至るまでに、両者ともに数学への積極的な思索が展開されるのだが、割愛する。この連載終了に際して西田は、田辺に次のように書き送っている。

小生はもう二三月の中に「自覚——」を一先づやめ今後は問題を分けて明了に精細に論じて見たいと考へ候併し「自覚——」（読者に対し随分無責任のものながら）岩波君の求もありまとめて出版して見たいと存じ居り候就ては小生は随分他人の書をよむの粗略なり小生の書きた中に誤も多からんと存じ候 何卒そういふ点にて御心付の処あらば御遠慮なく御指摘被下度願上候（……）あの論文はもはや貴兄と中川の外によりくれる人なしと存じ候 「十九・五三四」

このように、西田の側からしても『自覚に於ける直観と反省』の具体的な読者として想定され、承認されていたのは田辺であった。ここに、「悪戦苦闘のドッキュメント」「二十一」として難解なものと認識されてきたこの著作を、読者として認められていた田辺との関係を読み込むという仕方では、いくらか明晰に展開を整理する可能性が示唆されている。

五 田辺の博士号取得と京都帝国大学招聘（一九一八—一九一九）

一九一八年は田辺の人生にとって大きな意味をもつ年であったに違いない。一連の論文をまとめ直した『数理哲学

研究』が博士論文の審査を通過し、その後多くの科学者、哲学者に広く読み継がれることになる『科学概論』が出版され、西田からは「小生は機を見て貴兄を京都の文科の助教授位に推薦して見ようと存じ居り候が御考いかがに候か」〔十九・五五三〕と提案された年である。これを受けて翌年に田辺が京都帝国大学の助教授に就任してからは、両者は「京都学派」を代表する二人の哲学者として聳立することになる。最後に本節でその過程を押さえて、両者の関係性の概観を終えたい。この時期から西田は『意識の問題』に収録される論文を執筆し始め、田辺も『数理哲学研究』での一連の数理科学的業績から認識主観の研究へ移っていく。これらの諸論文も、例えばライブニッツ受容などの観点から非常に興味深い応答関係が考えられるのだが、ここでは招聘の経緯のみに限定して簡単に扱う。

前年に早稲田大学で激しい学校紛争が起こり、波多野精一が九月に辞職することになった。このとき深田康算が動いて、この一九一八年の一月から波多野は京都帝国大学の宗教学講座の授業を任されることになる。早稲田がもめていたこの時期に、ちょうど田辺は早稲田への就職の話が持ち上がり、このことを書簡で西田に相談していた⁽³¹⁾。田辺は「仙台上に居り苦い」〔十九・五四四〕という話を、これまでも西田に度々漏らしていた。例えば、田辺の担当する講義に出席する人数があまりに少なかったことが一つの深刻な心労であったようである⁽³²⁾。一九一四年の時点から西田は、「図書も少なかるべく話相手もなきことは自己の研究が果していかゞの価値あるものか誠に砂漠の中を独りで旅行する如き心持にて何となく覚束なき様に感ぜられるものには候が何卒かゝる事に頓着せず何処までも自己の信する所によつて御研究を御進め被遊候様奉祈候」〔十九・五一九〕と励ますことで、東北において孤独に思索する田辺を遠方から支えようとしていた。こういう状況を踏まえての早稲田への異動の相談に、西田は数学や自然科学の研究に関しては東北に残る方が便利ではあるが、哲学に関しては東京にいる方が便利なのではないか、と提案している。その後「早稲田の気風とは一致せざる」という田辺の心境を受けて、「断られ候はよき御決心なり」と寄

り添っている。田辺は結局早稲田の就職口を断るわけだが、これで哲学の研究状況が改善されるというわけではない。西田は「仙台に居ては純哲学の方面の書物を熟読研究すること御忘れなき様奉祈候」「十九・五四四」と念を押しているが、やはり田辺の状況に関しては心配するところがあったのだろう。『数理哲学研究』の審査と並行して「小生もできるだけ貴兄の将来のためにも考へ度と存じ居り候」「十九・五四八」と書き送っている。

六月十九日、『数理哲学研究』は無事教授会の審査を通り、田辺は博士号を授与される。この出版に際して田辺は西田に序文の執筆を依頼し、西田はこれを承諾している。

七月二十三日、西田は田辺に「全く小生の頭にだけある事」「十九・五五三」ではあるが、京都に招聘したいと考えている旨を告白している。これは一九一九年の帝国大学令改正に伴う大学改変に際しての機会であった。そのため田辺には東京でも採用の可能性があり、また東北でも昇進の話が出てきたようである。この複雑な事情の中、西田は田辺の意志にとにかく重きを置きつつ、京都に招聘できるような駆け引きを内でも外でも試みていた。一九一八年から一九一九年にかけての田辺宛書簡のほとんどが田辺の意志を問いつつ将来の地位に関しての内容を含むものであり、単純に書簡の数だけでもこれまでの量を上回り頻度も増えている。このようなやりとりの結果として、一九一九年五月十四日に「当地大学助教授として貴兄を御招きすること本日教授会にて確定いたし候」「十九・五六三」という瞬間を迎えることとなった。田辺は七月に一度鎌倉の実家に戻ってから、早速九月から京都で特殊講義「論理学」とカントの『純粹理性批判』の「分析論」の演習³³を担当した。この年の最後の書簡が八月七日で途絶えていることは、東北と京都という距離を埋めるための書簡が必要なくなり、同僚関係が実現した事実を端的に示していると言えるだろう。

結 論

本稿では一九一〇年代における西田と田辺の關係性に着目した。この時期の両者の交流は極めて良好な關係に象徴されるものであり、その關係を前提に多くの哲学的議論が織り込まれていることが確認できた。さらに田辺の『数理哲学研究』に関する議論が、『自覺に於ける直観と反省』を連載していた西田の問題意識と重なるものであることも、書簡などから垣間見た。もつともこの点に関しては示唆に留まる叙述に終わっている。今後はこの点に焦点を絞って分析する必要があるだろう。また、できる限り史實的整理を試みたが、拙い叙述により混乱を招く点があるかもしれない。特に時系列的な整理に関しては、注の後に付した付録の年表を同時に参照していただきたい。

固より以上の粗雑な叙述でこの時期の両者の全貌が明らかにされたわけではない。西田や田辺の哲学的内実に着目することが第一に重要であることは哲学研究的には言うまでもないことであるが、そのために孤立的に刊行著作の哲学的議論のみを分析対象とすることは、彼らの場合には適切とは言えない。むしろ現今指摘されつつあるように影響關係を広く見る視座が必要であるし、このことは本稿でいくらか明示されたと思う。それでも、この視座を余すことなく紙面に反映させることは極めて難しく、随所圧縮や捨象を経て限定的に論じることが避けられなかった。このことが却って不十分な点を際立たせていることもあるだろう。批判は批判として受けとめつつ、より精細で明晰な考察のための叩き台として、本稿が寄与するところがあれば幸いである。

〔凡例〕

- 一、西田幾多郎のテキストは、基本的に旧版の『西田幾多郎全集』（全十九巻、岩波書店、一九六五—一九六六）より引用し、「巻号・頁数」の形で略記する。新版の『西田幾多郎全集』（全二十四巻、岩波書店、二〇〇二—二〇〇九）は、新資料や年譜、索引などの点で適宜参照した。
- 二、田辺元のテキストは、基本的に『田辺元全集』（全十五巻、筑摩書房、一九六三—一九六四）より引用し、「T巻号・頁数」の形で略記する。
- 三、本稿は、令和元年度に提出した修士論文「数学的関心を中心に見る二人の哲学者の邂逅——西田幾多郎と田辺元——」（京都大学）の一部を元に、加筆・修正を加えたものである。

注

- （１）藤田正勝「西田哲学と田辺哲学」『思想』一〇九九号、岩波書店、二〇一五年、十一頁。
- （２）注（１）の論文でも論じられているが、この点に関して「田辺元の生涯と思想——田辺元先生没後五〇年を記念して」（『求真』十九号、求真会、二〇一二年）がより詳しい。
- （３）宮本和吉「田辺君の思い出」『田辺元全集』月報十、筑摩

書房、一九六四年、二頁。

- （４）桑木厳翼は彼を「英米に発した「プラグマティズム」も亦心理学によつて論理学を説かんとするもので、其説を独塊に伝へるに努めるイエルーザレムも亦先天説と進化説とを聯結せんことを図る点に於て、生起的方法を以て一切を説明せんとする心理主義に属するものである」という文脈で説明している（『カントと現代の哲学』岩波書店、一九一七年、二三五頁）。

- (5) 西田は「純粹経験派」と「純論理派」という呼称を用いている[・二〇九—二一〇]。
- (6) 注(1)、十一頁参照。
- (7) 新版『全集』『年譜』二十四卷、三二〇頁参照。また、「日記」[十七・二五六]も参照。
- (8) 多くの研究がこの論文を取り上げているが、その中でも特に「西田の問題意識と心理主義批判との間のずれ」を指摘した氣多雅子(「名者再考」西田幾多郎『善の研究』——純粹経験は心理主義的か——)、『思想』一〇九九号、岩波書店、二〇一五年)を挙げておきたい。
- (9) 桑木戔雄については田中節子「桑木戔雄と日本の物理学——相対性理論を軸として——」(辻哲夫編著『日本の物理学者』東海大学出版会、一九九五年)を参照。なお、本著所収の辻哲夫「日本における物理学の自立」は、長岡半太郎や石原純が活躍した当時の日本の物理学事情をも論じており、「相対性の問題」を起点とする田辺の物理学への関心を追う上で参考になる。
- (10) 一九一四年八月五日付田辺宛書簡で、西田は自分の考えとは反対ではあるが「必ず一読すべき論文」[十九・五二五]としてリッケルトの論文「一者、統一及び一」を勧めている。
- (11) 原題は、*Die Einheit der physikalischen Weltbildung*。紹介時、田辺は「物理学的世界形象の統一」と翻訳していた。
- (12) プランク『物理学的世界像の統一』田辺元訳、岩波書店、一九二八年。
- (13) 旧版の全集には収録されていないが、新版『全集』十三巻には、この時の講演の梗概が『独立評論』(一九一三)に発表されたものとして収録されている。これには「反自然科学的思想」という題目が付され、デイルタイ、ヴィンデルバント、リッケルトの三者の学説が紹介されている。
- (14) 例えば九鬼周造との関係で、宮野真生子『出逢いのあわい——九鬼周造における存在論理学と邂逅の論理』(堀之内出版、二〇一九年)がこれを取り上げている。
- (15) 「日記」[十七・三〇八]参照。
- (16) Hermann Cohen. *Die Logik der reinen Erkenntnis* (Hermann Cohen Werke, Bd. 6, hrsg. von Helmut Holzhey (Hildesheim: Olms Verlag, 1987-), S. 26-27).
- (17) Ibid., S. 12.
- (18) ここでこれらの問題を詳述することができないのが惜しまれるが、特にハイデガーが『カントと形而上学の問題』で遂行した「形而上学の基礎づけ」(Die Grundlegung der

Metaphysik)などを頭の片隅に置きつつ、このようなマールブルク学派的な「基礎づけ」の問題意識について即断的に解釈することには、筆者は慎重でありたい。

(19) そもそもこの書簡の発見は一九六六年の『西田幾多郎全集』改版時に由来するのだが、ここで発見された書簡のほとんどがこの時期のものであった。下村寅太郎は「追憶——記録的なこと二、三——」(武内義範・武藤一雄・辻村公一編『田辺元思想と回想』筑摩書房、一九九一年)においてこれらを「すべて師弟水魚の交わりを示す香氣に溢れた美しい書簡」(二八八頁)と語っており、波多野精一を交えながらこの邂逅の記録を書き綴っている。

(20) 以下のおおよその展開は、拙稿「〔研究ノート〕近代日本文学におけるヘルマン・コーヘン受容に関する覚書」(『日本文学論叢』二一号、愛媛大学人文学会、二〇一九年)でも触れた。

(21) 田辺のこの論文に対する西田の評価は高く、後に発表される「現代の哲学」においても二つの新カント学派の「精細にして明確なる叙述及び比較」(「一・三四八」)として紹介されている。

(22) 田辺宛の書簡で西田は「Sein」には種々の種類があるが

その中に通有性を見出すこともでき(るの)ではな(か)らうか 併し正確なる意味に於て存在といふことは右の如き広義ではなく時空の上に限定せられたものである 併しかく狭くかぎれば数学的対象の如きも存在といふことはできぬ」(「十九・五一―五一九」)と述べている。『自覚に於ける直観と反省』では基本的に「数といふのは客観的に存在するものではない、我々の思维の創造である」(「二・七五」という立場をとることで、経験的対象存在の実在性から区別する意味で「純粹思维」の側に数理の体系を包摂しようとしている。

(23) 「幾何学の論理的基礎」は後に『数理哲学研究』の外篇として収録されたが、「貴兄の幾何学の根本概念研究を拝見いたし度候」(「十九・五三二」)と西田に言われたことがおそろく一つの機縁となつて書かれたと考えられる。

(24) 主にこのスタンスは、主にパウル・ナトルプの『精密科学の論理的基礎』(Paul Natorp, *Die logischen Grundlagen der exakten Wissenschaften*. Leipzig u. Berlin: Druck und Verlag von B. G. Teubner, 1910)の叙述に負つてゐる。この著作の刊行後まもなく出版されたカッシーラーの『実体概念と関数概念』(一九一〇)も田辺は参照しているが、カッシーラー自身がナトルプのこの著作を典拠に加えていることから

じつ (Ernst Cassirer, *Substanzbegriff und Funktionsbegriff*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft. 1969. S. 51)「主たる参照軸はナトルプであると言つてよい。」

(25) 田辺元「自然数論(下)」『哲学雑誌』三三八号、五二頁。なお、この「直観の原始的統一」という表現について西田は田辺の意図を十分汲んだ上で「何だかあまり statical の様に考へられる恐なきか」[十九・五二三]と指摘している。

(26) 田辺元「連続、微分、無限(承前)」『哲学雑誌』三四九号、二四頁。

(27) 「貴兄も御健康ちと不十分なる由近來ちと勉強がすぎたるにあらざるか 休暇にもならば萬事を放棄して静に御保養遊ばれ度候」[十九・五三〇]。また、ちようど連載を開始した「連続、微分、無限」は当初エレア派のゼノンのパラドックスに関するベルクソンとラッセルの論争を最終的に論じるという目的で起稿されたものだったが、完結した三回目の掲載の末尾に「余の健康と身辺の事情とは遺憾にも今此の稿を続けることを許さないやうな始末となつたので、暫らく此処に筆を擱き他日期を得て右の問題を改めて論じたいと思ふ」(田辺元「連続、微分、無限」『哲学雑誌』三五一号、四八頁)と計画が頓挫しており、この体調不良が当時の田辺の研究に

大きな支障を与えたと考えられる。なお、この計画自体は翌年の「変数及び函数」で回収されている。

(28) 「変数と函数」「数理の認識」の御論文もし貴兄が哲学雑誌の方へ御約束もなくば何卒是非く哲学研究の方へ御出し被下度くれく願上候「時間」の論文の方も東京の方へ義理わるくなくば願上候」[十九・五三二]。このうち「変数及び函数」は、『哲学雑誌』に掲載された。

(29) 書簡「十九・五二一—五二六」のあたりの一連の流れを参照されたい。また『イデーナー』についての注目は「十九・五二五」を参照。

(30) この議論についても、西田は事前に田辺に「小生は Bolzano や Brentano を本として Meinong や Husserl や Lipps に至る例の Inhalt u. Gegenstand の区別などを論ずる奥国から起つた一派の思想に就て十分考へて見度と存じ居り候」[十九・五一四]と伝えていた。

(31) このあたりの事情は、遊佐道子「伝記」(『西田哲学選集別巻一』燈影舎、一九九八年、二六四—二六六頁)に詳しい。また注(19)の下村「追憶」、そして竹田篤司『物語「京都学派」(中央公論新社、二〇〇一年、四八—五八頁)も参考にした。

(32) 一例に過ぎないが、一九一五年から一九二六年頃に物

理学科の学生として田辺の課外講義を聴講した佐藤允によると、最初の心理学概論の講義は二十名ほどであったにも関わらず、次の哲学概論は「初めは数人でしたが、後には私と内田君〔内田良道という数学科の学生——筆者注〕と二人きり」になったという（佐藤允「田辺元先生追憶」『田辺元全集』月報十、筑摩書房、一九六四年、七頁）。

（33）この担当に関する背景は特に一九一九年五月十八日付の書簡と六月八日付の書簡を参照。また、八月七日付のこの年最後の書簡の末尾に「大学の授業のはじまるのは大抵九月十五日過と存じ候」〔十九・五七〇〕とある。

付録：1910年代を中心とする西田—田辺に関する年表

- [凡例]
- ・西田幾多郎については基本的に新版『西田幾多郎全集』第24巻所収の「年譜」を参照した。
 - ・田辺元については『田辺元全集』第15巻所収の「田辺元年譜」、『田辺元 思想と回想』所収の「年譜」を参照した。
 - ・西田、田辺の項目においては、刊本として公刊された著作を□で示し、その都度の時事を▬で示した。
 - ・『哲学雑誌』掲載論文のうち、「論説」ではなく「批評紹介」として掲載されたものは、題目の前に*を付した。

西暦	西田幾多郎(1870-1945)	田辺元(1885-1962)	その他
1904		7月 <u>第一高等学校理科卒業</u> 9月 <u>東京帝国大学理科大学数学科入学</u>	
1907	3月「實在に就て」		
1908	3月「『国文学史講話』の序」 8月「純粋経験と思维、意志及知的直観」	7月 <u>東京帝国大学文科大学哲学科卒業</u> <u>東京帝国大学大学院入学</u>	
1910	8月 <u>京都帝国大学 倫理学助教授</u> 11月「ベルクソンの哲学的方法論」	9月「措定判断に就て」 11月*「リップス氏『意識と対象』」 (文学士H・T生名義)	2月 京都文学会 4月『芸文』刊行 開始
1911	1月「トルストイについて」 1月『善の研究』弘道館 4月「愚禿親鸞」 8-9月「認識論に於ける純論理派の主張に就て」 11月「ベルクソンの純粋持続」	6-7月*「イエルザレム氏の『批評的観念論と純粋論理学』」	
1912	2月「法則」 9月「論理の理解と数理の理解」 10月「高橋(里見)文学士の拙著『善の研究』に対する批評に答ふ」 10月「認識論者としてのアンリ・ボアンカレ」	4月*「相対性の問題」 6月 <u>大学院退学</u> 8月*「カントと自然科学」 9-11月*「ブートルー氏『自然法の観念』」 12月*「桑木理学士の『物理学上認識の問題』」	5月 高橋里美 「意識現象の事実と其意味(一)」 6月 同上(二)

	(西田)	(田辺)	
1913	4月6日「歴史と自然科学」で講演 8月 宗教学講座の教授に就任 9月「自然科学と歴史学」 9月「自覚に於ける直観と反省」(一)～(三) (※以下「自覚」と略記) 11月「自覚」(四)～(六) 12月 文学博士号	3-5月*「プランク氏『物理学的世界形象の統一』」 8月 東北帝国大学理学部講師に就任 8月*「相対性原理に対するナトルプ氏の批評」 9月「物理学の認識に於ける記載の意義—キルヒホッフ及マッハの批評」 12月*「ボアンカレ氏『空間と時間』」	
1914	2月「『物質と記憶』の序文」 3月「自覚」(七)(八) 4月「『小泉八雲伝』の序」 8月 哲学哲学史第一講座の教授に就任 8月「自覚」(九)(十) 11月「自覚」(十一)～(十三)	2-3月「認識論に於ける論理主義の限界—マールブルヒ派とフライブルヒ派の批評」 3月*「桑木理学士の物理学の方法に関する一論文」 9月*「数学的対象の存在に就いて—メディクスの論文を読む」	1月1日 西田から田辺宛 に書簡交流開始 11月京都哲学会
1915	1月「自覚」(十四)(十五) 3月「自覚」(十六)(十七) 3月『思索と体験』千章館 6月「自覚」(十八)～(二十) 12月「自覚」(二十一)～(二十三)	2-4月「自然科学対精神科学・文化科学」 3-4月「自然数論」 11月『最近の自然科学』岩波書店	
1916	1月「自覚」(二十四)～(二十六) 3月「自覚」(二十七)～(二十九) 4月「現代の哲学」 7月「『認識の対象』序」 8月「コーヘンの純粹意識」 10月「自覚」(三十)～(三十二) 11月「自覚」(三十三)～(三十六) 12月「自覚」(三十七)(三十八)	2月14日 結婚 2-3, 5月「連続、微分、無限」 5月「普遍に就いて」 6月 翻訳『科学の価値』岩波書店 12月「負数及び虚数」(上)	4月『哲学研究』 刊行開始
1917	1月「自覚」(三十九) 2月「自覚」(四十)(四十一) 4月「自覚」(四十二) 5月「自覚」(四十三)(四十四) 5月「ロッツェの形而上学」 5月『現代に於ける理想主義の哲学』弘道館 6月「種々の世界」 10月『自覚に於ける直観と反省』岩波書店 10月「日本的といふことに就て」	1月「負数及び虚数」(下) 4月「数理の認識」 5-6月「変数及び函数」 7月「道徳的自由」 8月「時間論」 8月「再び道徳的自由に就いて」	9月 三木清、京都帝国大学入学

	(西田)	(田辺)
1918	1月「意識とは何を意味するか」 1月「ライプニッツの本体論的証明」 3月「象徴の真意義」 6月「感覚」 7月「感情」 <u>9月3日 母寅三死去</u> 9月「意志」	1-3月「幾何学の論理的基礎」 2-3月「独逸唯心論に於ける哲学的認識の問題」 5月「左右田博士の著『経済哲学の諸問題』を読む」 5月「無限の世界」 <u>6月19日 博士論文通過</u> <u>7月「数理哲学研究」より文学博士号</u> 9月「科学概論」岩波書店 9月「個別的因果律の論理に就きて左右田博士の教を乞ふ」 9月「カントの自由論に就いて」 11月「ライプニッツ哲学の意義」
1919	1月「芸術の対象界」 2-3月「経験内容の種々なる連続」 4月「意志実現の場所」 5-6月「意志の内容」 6月「関係に就いて」 9月「意識の明暗に就いて」	1月「真といふ語の意味」 5月「「意識一般」に就いて」 <u>8月 京都帝国大学の助教授に就任</u> 9月「紀平学士論文中の引用句に就き一言す」 11月「認識主観の問題」(一)